

高橋道政10年のバランスシート

貴志雅之

はじめに―高橋知事の高い支持率

六〇七年前まで道政記者クラブにいて、そして今年三月から北海道新聞社論説委員室で道政を担当しています。道政の現場を離れていましたが、これまで感じてきたことをお話しします。

二〇一三年四月に高橋道政が一〇年を迎え、北海道新聞社では世論調査、連載企画などを行ってきました。世論調査の結果は、高橋知事の道政運営に対し「大変良い」「まあ良い」と肯定的な評価は六一%と高率でした。過去に同様の調査を行ってきましたが、就任二年目の二〇〇五年四月に高橋知事の支持は最高の六六%、二〇一〇年七月調査では二番目に高い六四%、そして今回はそれに次ぐ三番目の高い支持でした。

一方、「まったく良くない」「あまり良くない」の否定的な評価は一五%と少なく、二〇〇七年以降では最低の数値です。

なぜ、高橋知事は高い支持を得ているのか。支持の理由を聞いたところ、最も多かったのは「目立った失策がない」で三五%と突出していました。「指導力がある」「イメージが良い」「他に適当な人がいない」「行政手腕がある」は一〇%前後で

同程度の比率です。全体では少ない「支持しない」人たちの理由は、「目立った実績がない」が最も多く三一%。支持と不支持は表裏からみている評価になっていきます。

次に「この一〇年間で北海道がどのように変わったのか」と聞くと、「変わらぬ」が五六%と最も多い、しかし知事の評価は高い。「まあ良くなった」は二九%で、「大変良くなった」は三%。これとは逆に「少し悪くなった」は九%で、「とても悪くなった」が三%という結果です。

さらに高橋知事の四選については、「目指した方が良い」が五〇%、「交代した方が良い」は四四%と、小差で拮抗しています。四選を選んだ人の理由は、いまの生活が安定しているから代わらなくていい、というのが多い。知事の交代を選んだ人は、長期政権はよくないと考えている人が多く、道民にはバランス感覚があると感じています。

六一%の支持率は高く、支持の最大理由は「目立った失策がない」なので、道民が何となく好イメージを抱いているといったぼんやりした支持の色彩が強い。ふんわりとした、何となく良い感じだね、という理由で高橋知事の支持率が高く推移していることが推測できます。

このイメージの良さはどこからくるのでしょうか。

か。二〇〇三年、道知事に初当選し、道政史上初めて的女性知事というインパクトは強く残っています。加えて、知事になった翌年一月に胃がん摘出手術をし、一見きしゃやな女性が、大病を克服して一生懸命に知事の仕事をしているという印象が広がったことが第一にあります。道内各地を回ると、「はるみちゃん」と呼ぶ声が必ずあり、その都度知事は手を振ったり、握手をして「よろしくお願いしますね!」と笑顔で応える愛想の良さがあり、その柔らかな人当たりの良いというイメージが浸透していると言えます。

高橋知事は元経産官僚で北海道経済産業局長の職にもありました。だから、北海道の経済政策についての関心は元々高い。そのため、北海道の産業基盤を育成することに重点を置くという方針を当初から持っています。その一つとして力を入れたのが地産地消です。代表的なのは道産米食率向上「米チェーン」の取り組みで、テレビコマーションにも頻繁に登場しました。こうした取り組みも好感度に結びついています。

自分を演出することが巧みで、それがイメージの良さ、何となくいい、という感覚を道民が持つことにつながっていると思います。

1 北海道政策の評価

北海道の産業基盤の育成

政策については、いま触れたように就任当初から北海道経済への関心が高く、北海道を生かした産業基盤の育成に向けて企業誘致に積極的に取り組みます。トヨタ自動車本社に自ら出かけ幹部と直談判し、結果的にトヨタグループのアイシン精機が苦東に進出することを後押ししました。実績を残しているかたちになっています。

塩野義製薬は北海道大学と共同で研究拠点を設け、新たな医薬品の開発に取り組むことになりました。知事はこの誘致にも力を入れていました。産業基盤整備については、一生懸命に推進する姿勢を見せています。

北海道経済の活性化に加え、北海道ブランドのブラッシュアップ、北海道ブランドの優位性を発揮するための取り組みが、食関連産業と観光産業の育成です。一期目から三期目の間に、食の安心・安全条例の制定、米チェン、地産地消に力を入れてきました。さらに、新千歳空港の機能拡充として国際線ターミナルの整備をすすめました。

二〇一二年春からフード特区（北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区）が本格的に始動しています。北海道の食と農水産業を活性化させるために、国による税制・財政、金融の支援措置や規制の特例措置が適用されることになりました。現在、このフード特区をアベノミクスの一環である戦略特区に指定するよう要請しているようです。

ただ、一方でうまく進んでいない政策もあります。一期目に雇用を五万人増やす公約を掲げましたが、達成できませんでした。経済は役所の政策通りにすむものではなく、地方自治体にとっては難しい面があります。いまアベノミクスで景気の上向き感があります。だが、全体的にみて高橋道政の実績、効果のあったものは何かを考えると、若干の雇用増はあっても、依然として失業者は約一三万人と多い。道の法人税収入は増えない。トヨタ、アイシン、塩野義製薬の企業誘致があつたにせよ、北海道経済全体への効果はあまりみえないという印象は拭えません。

北海道を生かした産業政策は知事の思い描いた結果にはまだまだ遠い。ですが大きな失敗というものでもありません。これが失策がないイメージをつくっている一つになっています。

時機と運に恵まれた事業

さまざまな事業やイベントの誘致が、高橋知事の好感度を押し上げている面もあるでしょう。本人の力や努力がどこまで効いているかわかりませんが、知床の世界自然遺産登録、洞爺湖サミットの開催がありました。北海道新幹線では、一期目のときは函館までの開通が決まり、三期目になって札幌までの延伸が決まりました。

前述したように、知事の力がどこまで通じてこの結果が生まれてきているのか分かりませんが、知事が先頭に立っている、一生懸命頑張っていることの見せ方は巧みです。

たとえば、知床は二〇〇五年、南アフリカ共和国のダーバンで行われたユネスコ世界遺産委員会

で登録されましたが、知事は斜里町の牛来町長と一緒に参加し、ユネスコの委員にアピールする姿や、登録が決まって涙を流す場面取材させています。時機、運が良かったと言えるでしょう。道庁を取り巻く環境の変化や潮流に乗って、好演出になったと感じています。

経費削減に終始、支庁制度改革の失敗

知事就任のときから、厳しい道財政で手足が縛られるなか、何ができるかが最大の課題で、自分の考える政策をどう実現していくか苦心し、前述した産業育成策に取り組んできました。それでも税収は落ち込みました。知事に就任する前年の二〇〇二（平成一四）年度決算の道税収入総額は五五八三億円でしたが、決算額が確定している直近の二〇一一年度の税収総額は五三二一億円で、この間、約二六〇億円減少しています。産業政策により北海道経済が活性化していれば、法人事業税収入や地方消費税が増えるはずなのですが、政策は期待したほど効果を上げていません。

厳しい道財政への対応として、行財政改革による職員数と給与を大幅に削減。事業の外部委託をすすめ、道によれば二期目のときは三五〇〇人分の業務委託を行いました。職員給与の削減も続いています。二〇一三年度は交付税削減に連動して、さらに給与がカットされました。このように、脆弱な財政には主に歳出削減で対応しているのが現状です。

また、二期目のときに「二〇〇年に一度の改革」と位置づけて支庁制度改革を行いました。結果的には、支庁から総合振興局、振興局に名称を変

えただけというのが道民の印象です。知事本人は、一四支庁の数を減らしたかったようですが、実行できませんでした。

支庁制度改革の失敗は、市町村との連携の不十分さが理由として上げられています。頻繁に市町村長と議論、交流をして、改革の意義と内容を理解してもらったことができなかった。市町村、地域の声を聞けなかったことが失敗した最大の原因と多々指摘されました。

道政策の評価として、経済政策は良い面もありますが、効果が上がっていない面も多々あることは先ほど指摘しました。そのマイナス面は知事の好イメージで補われているとも言えます。そのイメージは初の女性知事、病気の克服に加え、運の良さなどでつくられ、結果的に「失策がない」との評価につながっています。

外向きにはそれでいいでしょうが、内に対してはお金がない状態なので、職員と給与の削減、事業の縮減といった歳出削減に終始している。こうした環境もあって、道庁が一体となつていろいろな政策や課題に取り組む態勢になつていない印象を受けます。

2 高橋知事の評価

大局観の欠如とバランス感覚

さて、高橋知事自身に対する評価はどうなのか。

一〇年を経て知事自身は、「『現場主義』『道民目線』『母親目線』で精一杯やってきました」「さまざまな取り組みを確実に推進できたのも、地域を思う皆さまの真摯な声を聞かせていただいたか

らこそです」と度々語っています。

しかし、大局観に欠けると思われており、北海道をどのような地域にしたいのか、知事が描く北海道像が見えないとの指摘があります。ある道内の町長は「(知事に)北海道ドリムがない」という言い方をしました。

四月の道新連載企画でも触れていますが、知事は踏み込まない面があり、踏み込む前にいったん停止してしまう。波風を立てることに、非常に慎重になり、トラブルはできるだけ避けたい、安定した穏やかな道政運営をしたい、これまで培ってきた元官僚という経験則がそうさせるのでしよう。その裏返しとして「目立つた失策がない」「実績がない」という評価につながることに、共通しています。

知事が言うのは、力の入れ方に差をつけると不公平感が生まれ、道民はどう感じるだろう。一様に道民の生命、財産を守り、道民の生活を向上させていく道政の取り組みを考えると、そこはバランスよく行わなければならない。波風を立てたこと、不安定にさせること自体が道民の生活に影響を及ぼす。行政としてあってはならない、という信条が知事にあるのでしょうか。バランス感覚で、無難さを求めるというのが、高橋知事だと言えるのではないのでしょうか。

合理性を求める

知事がもう一つ求めているのは、合理性です。官僚だったこともあり、理詰めでない政策に取り組まない。たとえば、人口減少、高齢化、過疎化で自治をどうするかが問われています。知事は、

お金がない中、いかに道民への行政サービスを低下させないで行財政運営していくかを考えます。その一つがコンパクトシティです。地域で散居する人たちの住居をまとまったところに集住し、行政コストを下げることを考える。

地域で道民が安心して暮らし続けるためには、地域医療の問題もあります。道内では医師が偏在しています。たとえば人口一〇万人あたりの医師数は、医師の多い札幌圏と少ない根室圏では約六倍の差があり、地域医療の問題は深刻です。このため、一定のまとまったところに道民が住んでいれば、医師も診療しやすいし、拠点病院を置くことができる。知事流の合理的な政策の発想が底流にあります。

一方、こうした考えで地域の問題を解決していくのなら、議論を起こして、道民、地域の意向、意見を聞いてすすめることが必要であり、知事は率先してそうした場に飛び込んでいくことが求められます。だが、局面打開への指導力、突破力がないとの指摘もあります。

知事は、必要だという話しはしますが、踏み込んだ議論をしない。合理性を求めている反面、障害や波風の立つ不安定さが察知されると、退いてしまう。それがバランス感覚、無難さなのではないでしょうか、知事はそのように対処しているように見えます。

笑顔の裏のしたたかさ

知事が道民に接したり、おもてむきの表情は、笑顔をふりまき親しみを感じる、一生懸命頑張っている印象を与え、高い好感度です。しかし、そ

の笑顔の裏には何かがあるのか。一つは、微妙な問題には慎重な態度で様子見の状態になりますが、道民意思が明確な場合で賛否が分かっているときは、態度をはっきりさせます。このような使い分け、態度がよく見られます。

停止中の北電泊原発3号機再稼働については、現在、原子力規制委員会が審査を続けていますが、再稼働に対して知事は賛成とも、反対とも明確な姿勢を示していません。北電との関係をいろいろ考えるでしょうし、毎週あった道庁前の脱原発アクションも目の当たりにし、道民の意見が割れていることは知っている。経済界は、原発が再稼働しなければ電力料金が上がり企業経営を圧迫するので、再稼働の容認を知事に働きかけています。知事の支持団体に対して無碍にできない、しかし道民の脱原発の気持ちを見無視できない、と悩み逡巡しているので、ぎりぎりまで判断を示さないでしよう。あるいはしたたかに、再稼働は国が決めるようにし、知事の責任を回避する方向にするのかもしれない。

一方、森元首相の訪口にあたって北方領土については四島返還を主張し、PPPは道内の農業団体が強く反対し、北海道経済への深刻な影響が考えられるため、反対の意向を表明する。知事は世論の動向、道民の意向をよく見ながら道政運営に当たっています。

3 望まれる知事像とは

北海道をどうしたいかという絵を描けるか。北海道をどうするのかを、知事は表明するべきだという声は多くありますが、高橋知事は現実主義故

に大きな理想は示さない。現実的に課題に対処し、問題があれば取り組み、それによって道民の生活が改善していけば行政として十分ではないか、という考えで道政に臨んでいるのでしょうか。しかしそれは課題や、目標に向かって頑張っていく活力はなかなか生まれない。

具体的に北海道をどうしていくかは、これから議論していくべき事柄です。いかに北海道が自立して、道外から移住してくる人が絶えない、夢のある北海道をどうつくっていくか、ということをお私たちはよく議論します。どのような政策を行えば、そのような方向になるのか、もっと議論を深める必要があります。「北海道ドリム」があると、それに即した産業政策の立案や、国に対しても権限移譲や特例など具体的な要求ができます。道民が共有する理想ができれば、行うことは明確になつてきます。対処療法ではなく、目指す姿を固めていくことが、元氣な北海道をつくる基本だと思います。

関連して、知事は摩擦を覚悟で議論を巻き起こせられるか。トラブルを避け、波風を立てせない無難な方向での道政運営を評価する道民もいます。たとえば、新潟県の泉田知事は、県内の原発再稼働をめぐる、国に対して異議申し立てをしたことにより、県の判断が問われることになりましたが、知事の姿勢を見せることによつて、原発に対する県民意識が明らかになってくる。

議論を起こすためには道民、首長との対話が必要です。そのなかで自身にとって必要なことを明確にし、具体的な自分の考えを表明するのであれば、議会や地域での議論に耐えられます。議論をしなければ物事は進展しません。地域医療、過疎、

原発の問題などみなそうです。知事の考えを述べ、議論を起こし、修正を要することは修正し、というかたちにならないと進展しない。公のかたちで、皆が分かるかたちで決めていかないと、問題は打開できません。

政策を実行する上で、自身が責任を持つという姿勢を示せるか否かが、首長が問われる点だと思います。高橋知事はこうしたことを回避しているように見えます。政治家として必要なのは、道民に対する言動を明確にすることです。

三期目は残り二年ですが、四期目に臨むのかどうかについて、庁外からはいろいろ観測されています。国政に転出する可能性もあります。北海道経済が好転すれば道政の局面も変化するので、さらに取り組みたい課題も出てくることも考えられます。先行きは不透明ですが。

へきし まさゆき・北海道新聞社論説委員

本稿は、二〇一三年八月二二日に行った、所内研究会の問題提起をまとめたものです。

文責・編集部